

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和4年度 第2号 2022年11月25日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和4年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2022年11月10～16日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を大きく下回った。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は登別沖及び日高沖（静内沖）。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～500mにかけて強くみられた。ただし、魚群は海底よりやや離れた深度400m付近が中心であった。
- ・ 水温は、渡島沖、胆振沖ともに水深200m付近では平年をやや下回ったが（約1℃）、それ以外ではほぼ平年並みであった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広く観察されましたが、その中でも胆振沖の184漁区および日高沖の168漁区に強い反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期よりは下回りましたが、最近10ヶ年（2013～2022年度）では、2013、2021、2014年度に続く反応量となっており、2015～2020年度よりは高い値でした（図3）。なお、前年同期は鹿部～登別沖（F～Hライン）の水深400m付近に海底から浮いた強い反応が沖まで伸びて広範囲に観察されましたが（図1右下図）、今年度も同様な強い反応が観察されたものの、それほど沖まで伸びておらず、強い反応の範囲は狭くなっていました。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～600mの海底上に観察されました（図4）。とくに、登別沖（Hライン）及び日高沖（Pライン）には、濃密な反応が観察されましたが、今年度も魚群は海底から50～100mほど離れて浮いており（深度350～450m付近）、海底に着いた反応は水深450～500m付近の狭い範囲になっています（図2）。
4. トロールによる漁獲調査については、魚群反応が強かった水深450～500mでは敷設漁具（刺し網）が多かったため、水深200～300mで数回実施しました。その結果、この水深帯の漁獲物は体長（尾叉長）20cm前後のスケトウダラ未成魚が主体となっていました（図5）。なお、この調査の直前に実施した刺し網漁獲物の測定結果では、尾叉長40～45cmのスケトウダラ成魚が主体となっていました（図5）。この組成は1次調査でトロールにより漁獲されたスケトウダラの組成とほぼ同様であったことから、今後の漁獲物も尾叉長40～45cm前後が漁獲物の主体になるものと考えられます。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（Dライン沖）、胆振沖（Hライン沖）ともに、水深200m付近で約1℃平年（2002～2021年度のこの調査における平均値）を下回りましたが、それ以外ではほぼ平年並みとなっていました（図6）。

なお、次回の調査は年明け後の1月中旬（2023年1月12～20日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

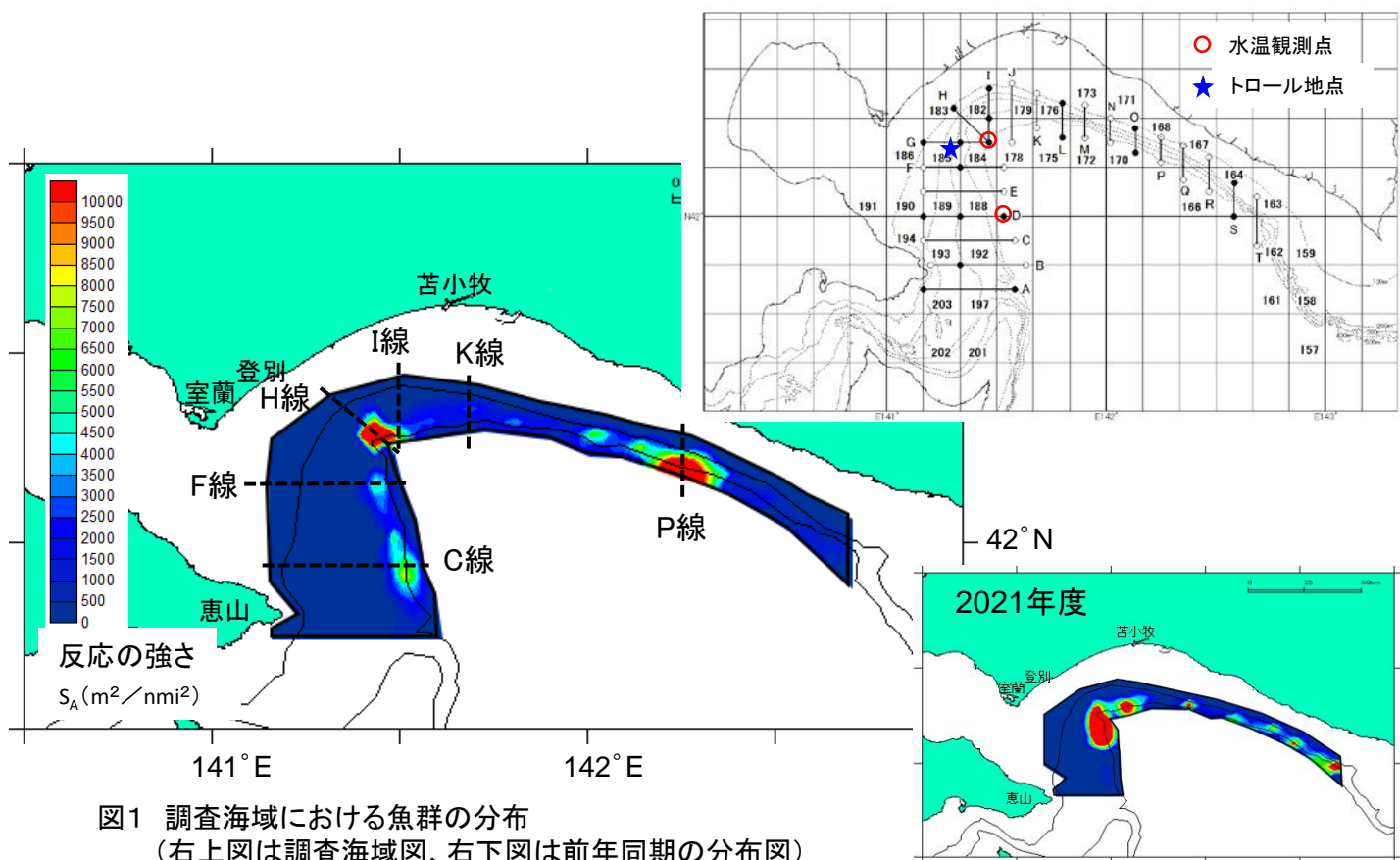


図1 調査海域における魚群の分布
(右上図は調査海域図、右下図は前年同期の分布図)

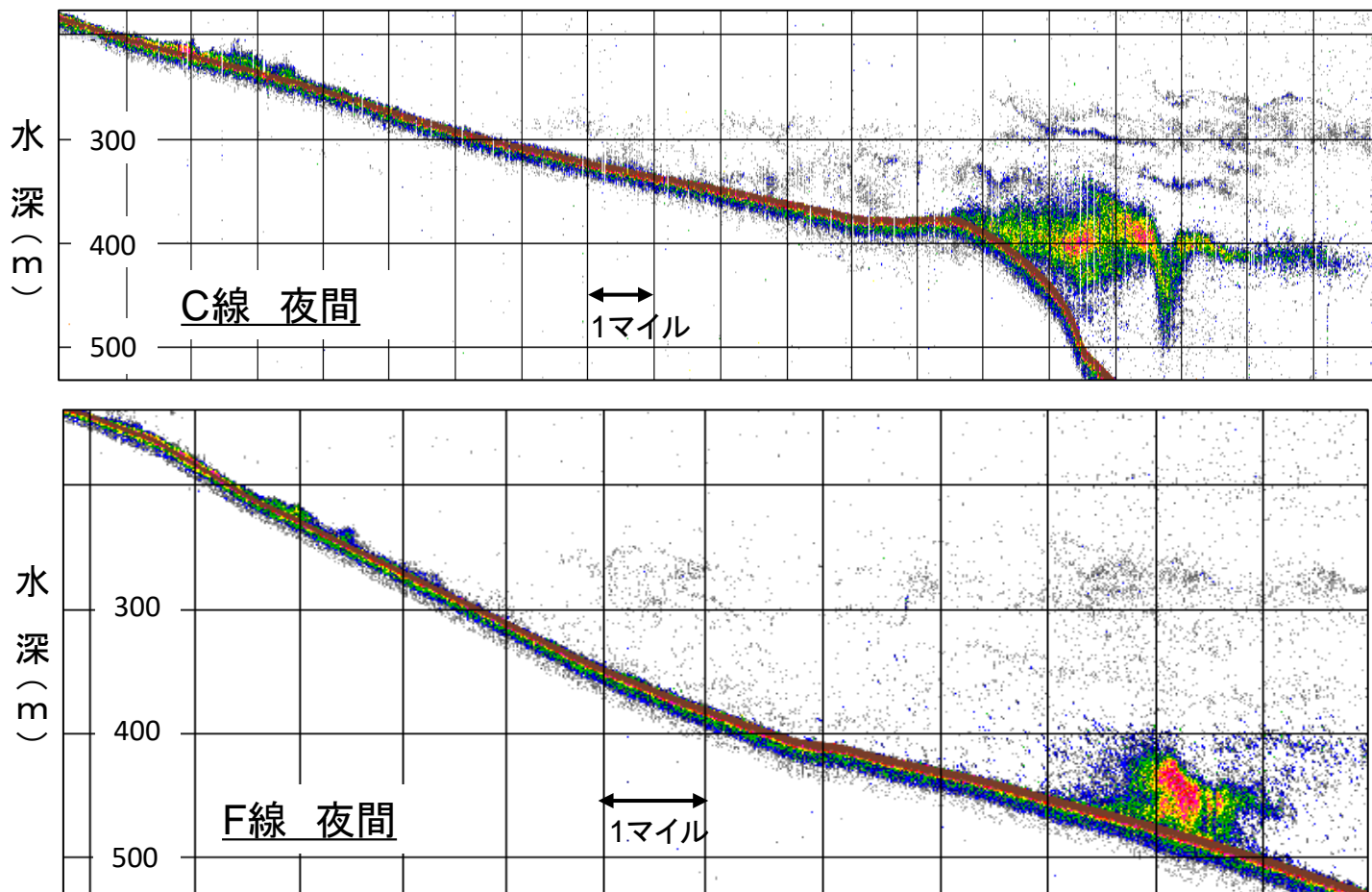


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

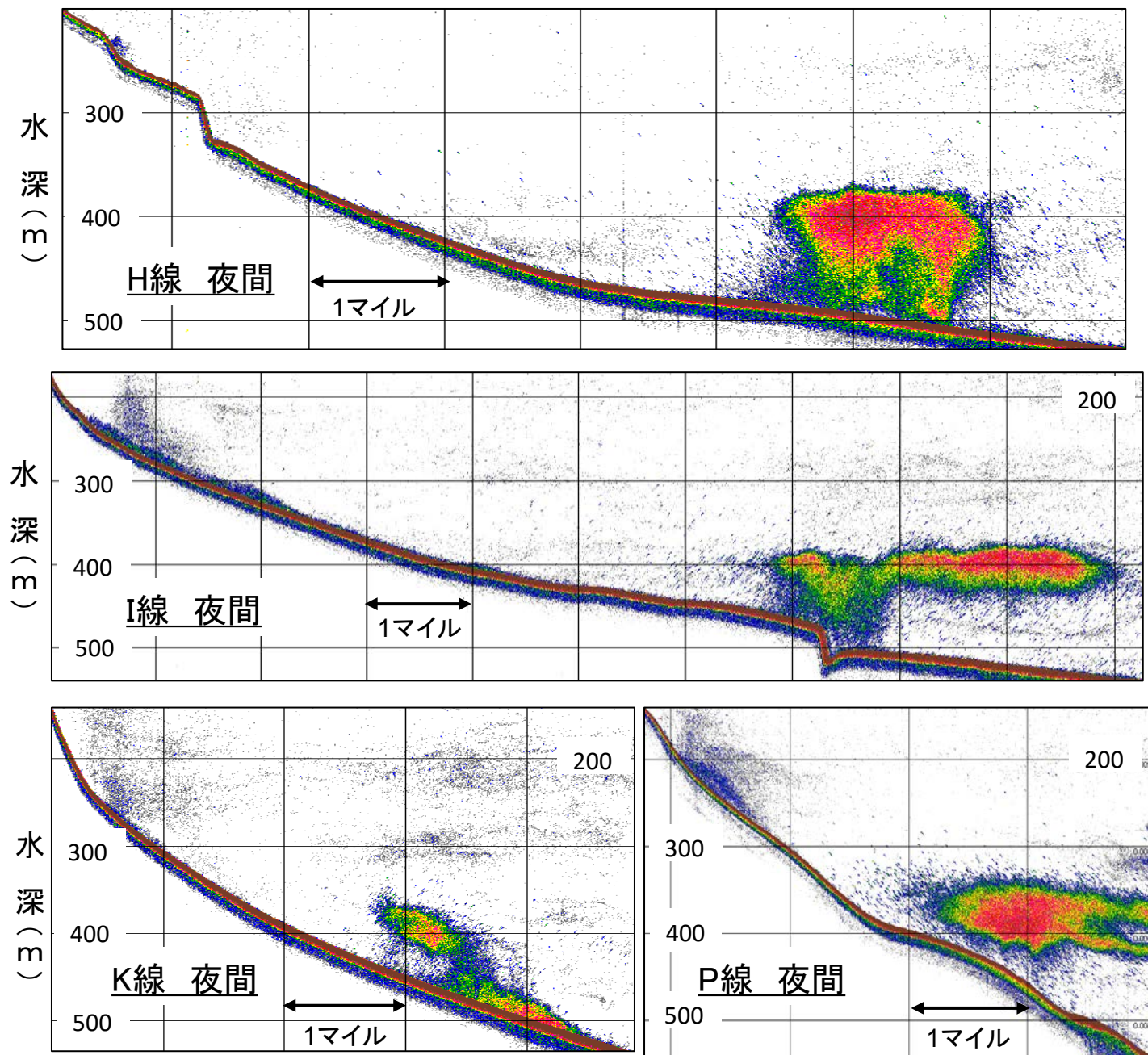


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

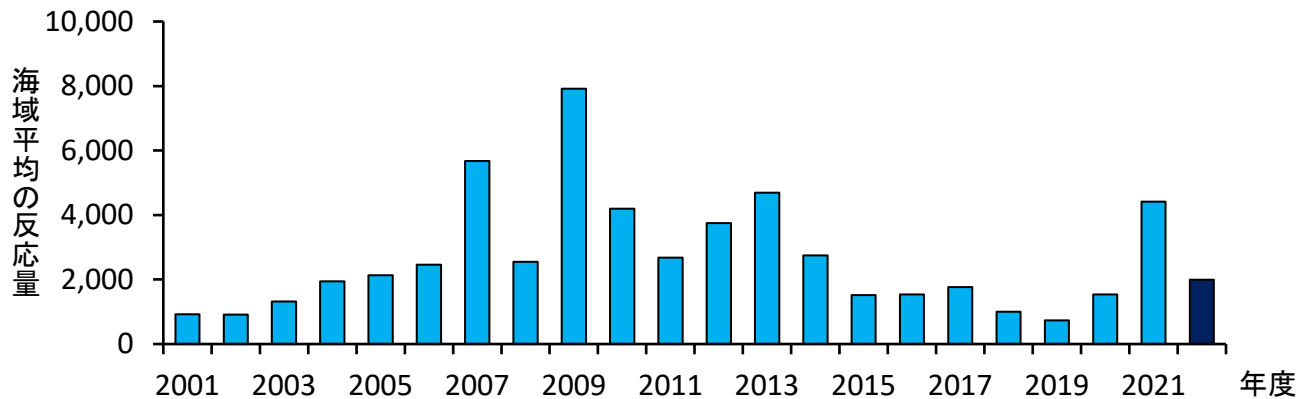


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移(1平方マイルあたりの反応量)

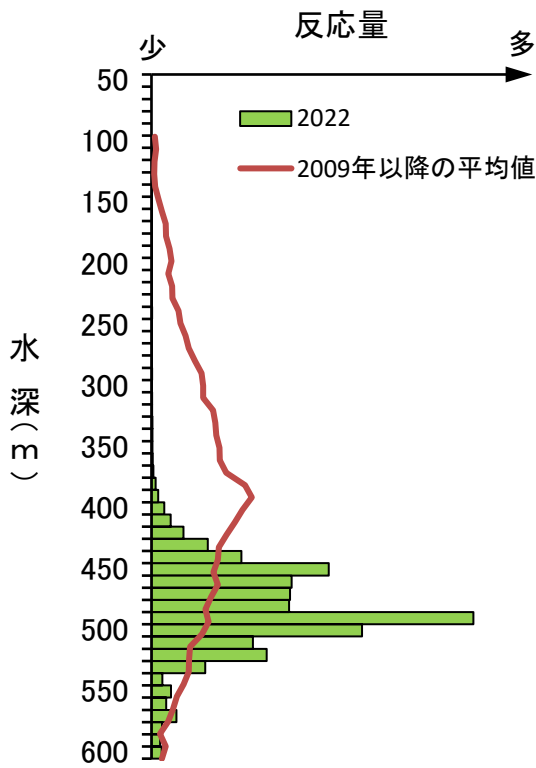


図4 水深別の平均魚探反応量(海域全体)

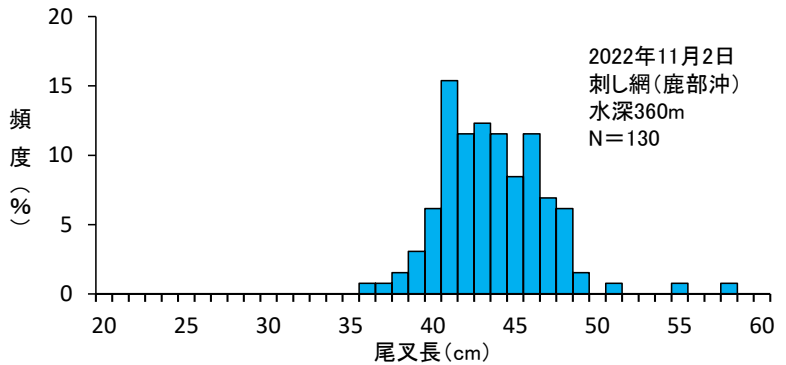
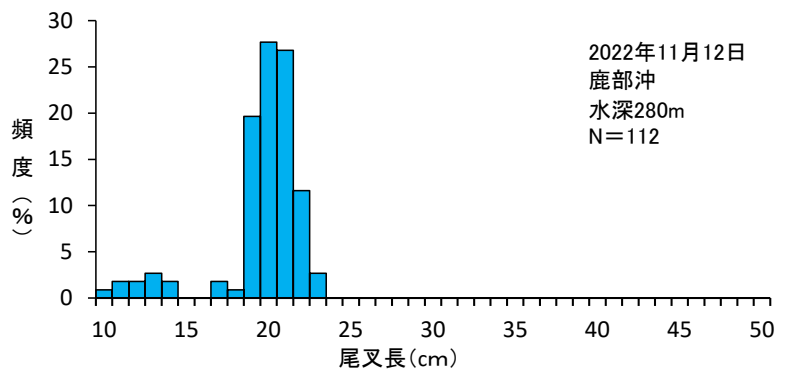


図5 スケトウダラ漁獲物の体長組成 (上:金星丸トロール, 下:刺し網)

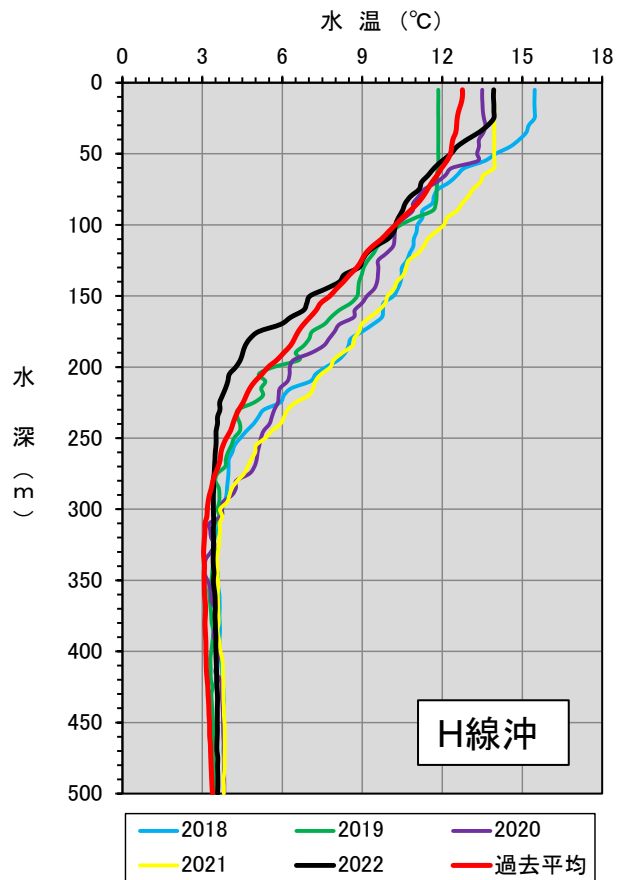
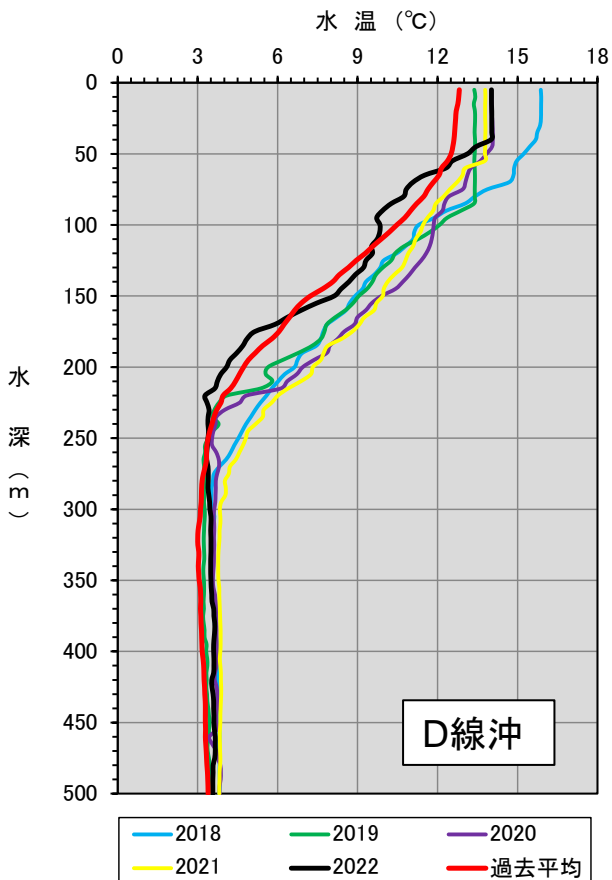


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:Dライン沖(N42° ライン), 右:Hライン沖(登別沖) (過去平均:本調査における2002~2021年度のそれぞれの調査点の平均値)